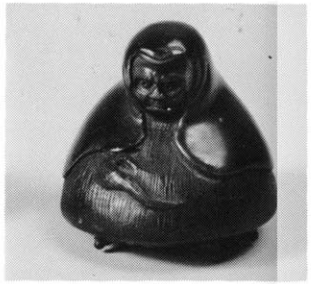
美術随想 (14)

エルランゲル・ジョーナス根付蒐集について

大和文華館 館長 石澤正男

No. 1 袋に包まれた布袋 舟民作



No. 2 蓮の実達磨 光日作

前号ではハロルド・G・ジョーナス博士御夫妻から御愛蔵の根付40個の御寄贈を受けた経緯について読者の皆様に御報告をしましたが、紙面の都合で全部を小さな写真で御紹介しただけでしたので、この号では40個の名称、作者、材質等を挙げ、それらの中から特に興味のあるものを数個御紹介したいと思います。まだ十分の調査が行き届いておりませんので、暫定的な発表と御諒解願いたいと存じます。

1	袋に包まれた布袋	舟民	木造
2	蓮の実達磨	光日	木造
3	藤豆蕨摶ぎ	光春	象牙
4	おかめ達磨	正広	〃
5	瓢箪を背負う仙人	正守	〃
6	桃葉の上の鼠	無銘	〃
7	おかめの面をつけた頭	〃	〃
8	狂言面と小道具	玉民	〃
9	太鼓	無銘	〃
10	九箇の神楽面	〃	〃
11	三番叟	正之	〃
12	横臥する牛	無銘	獣牙
13	大瓢箪を担ぐ男	静玉	象牙
14	角兵衛獅子	飛鶴	〃
15	獅子舞童児	永楽	陶器
16	獅子頭	無銘	鎌倉彫
17	大口をあけている男の面	〃	木造
18	般若面(大)	〃	〃
19	異相の面	〃	〃
20	鬼瓦の面	〃	〃
21	羅漢の面	出目上満	〃
22	般若面(小)	無銘	木造
23	神楽面九箇	〃	〃
24	狂言面(?)	〃	〃
25	狐面	豊次刀	〃
26	上唇をなめる男の面	無銘	〃
27	椀の中の般若面	〃	象牙と獣骨
28	椎茸	〃	木造
29	武悪面	忠利	〃
30	武悪面	雲龍	〃
31	銀杏の実	無銘	象牙
32	狂言面と面箱	無銘	象牙と木造
33	烏天狗の面	〃	木造
34	石灯籠彫(鏡蓋型)	〃	獣骨
35	お歯黒を染める女	〃	象牙
36	按摩	〃	〃
37	天狗面をもつ童児	〃	〃
38	木の実に彫り出した顔	一口	木実
39	ひょっとこ面	地獄	象牙
40	般若面	無銘	犀角

この一覧表でみますと40箇のうち作銘のあるものは17箇、他の23箇は無銘の作品です。作銘のある作品は美術工芸全般を通じて、むしろ真偽の点について警戒を要するものの多いことは原則といってよい現象であります。とくに根付の世界では、根付の流行しはじめた江戸初期のものには無銘のものが多いのはよく知られている通りであります。ここではエルランゲル・ジョーナス根付蒐集のうちから作銘の有無や材質を問わず制作の優れており、主題の面白いもの6点をとりあげて御紹介したいと思います。

(No.1)「袋に包まれた布袋」銘・舟民作　布袋は中国唐時代の有名な禅僧で、いつも福々しい容貌と太鼓腹を露出し、背中には大きな袋を担いで、受けた喜捨をそれに入れることにしていた、と伝えられ、日本にも早く紹介され、七福神のうちに数えられてきました。この根付では、普通背中に担いでいる袋の中に、福々しい笑顔と、宝珠をもった右手と左指先だけを出して、すっぽり包まれている姿を現わした諧謔味の豊かな作品です。作者の舟民は姓は原、18世紀の中頃に大阪と江戸で活躍した原舟月の流派の工人と見られます。材質は桜、高さ3.5cm.幅4.7cm.

(No.2)「蓮の実達磨」銘・光日　一見しては達磨の坐像ですが、手にとると達磨の下半身は精巧な蓮の実で、しかも12箇ある実のうち8箇は自由に動く彫り抜きになっています。従って達磨像は置き方によって正坐したり、前後左右に傾くという巧妙なからくりが仕組まれています。作者の光日が伝不祥なのは残念です。材質は桜。高さ4.8cm.幅4.4cm.

(No.11)「三番叟」銘・正之　背に花菱の紋をつけ裾に若松の文様のある服をまとって、鼓を打ちながら舞台に歩み出るところ。細部の表現が巧みで、非のうちようがありません。作者の正之は宝春齋の別名で19世紀初期に活躍した人です。材質は象牙。高さ4.7cm.

(No.35)「お歯黒を染める女」無銘　上衣を脱ぎ前屈みの女が、渡金をのせた耳盥の前に坐り、その渡金の中央にすえられているかね皿（おはぐろ入れ）に筆をひたして歯をそめているところ。あけた口から黒く染った歯が見えています。明治以前には、どこの家庭でも見うけられた既婚婦の日常の光景に違いありませんが、欧米人はもちろん、現代の日本人には奇妙な光景です。材質は象牙。高さ3.7cm.

(No.36)「按摩」無銘　大きな男が坐って按摩をしてもらっている光景です。按摩はこの男の右肩に左手を置き、右で腕の先をつかんで揉みほぐしているところ。按摩の顔の描写が一目で盲人と判る巧妙さに感心させられます。按摩されている大男は顔を左に傾けて天井を眺めている様子ですが、眼を大きく開いて気持よさそうな表情をしていますが、この二人の男の表情の対照も堂に入ったものといえるでしょう。材質は象牙。高さ3.5cm.

(No. 5)「瓢箪を背負う仙人」銘・正守　長い杖を両手でもち、左手にあるなにものかを凝視し、口もその方へ向けてうそぶいており、左

No.11　三番叟　正之作

No.35　お歯黒を染める女

足を右足の膝近くまで挙げていますが、両足の指には力が籠っていて、いかにも興奮している様子が感じられます。仙人の眼と口は黒檀らしい象嵌にしてあります。手に瓢箪をもっている仙人の代表的なのは鉄拐ですが、首の後に瓢箪をくくりつけている仙人は寡聞にして知りません。作者の正守は19世紀に入ってからの人と考えられますが、伝不詳です。ただこの種の大形の根付は初期のものに多く、また仙人のような主題も同様で、その点ではかなり復古調のある根付といえます。材質は象牙。高さ7.8㎝.

根付は今では実用を離れ、過去の遺物となりましたが、主題の範囲の広大なこと、材料も多種多様であり、それをこなす技術の巧妙さは正に日本を代表する小彫刻というべきものであります。奇抜さと機智にとんだ表現は根付の生命ともいうべき点であります。明治初年以後、根付は印籠、煙草入れに附随したもの以外に単独にも外国人の蒐集の対象となり、刀剣小道具、浮世絵版画と同様に大量のものが欧米に流出してしまったのは惜しまれてなりません。(28-2-'99)

No.36　按摩

No. 5　瓢箪を背負う仙人　正守作

季刊 美のたより No.46
昭和54年4月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.